

話 童

赤い浮袋

小 野 ふ さ

◇……◇

富美子ちゃんはまだ生れて一度も海を見たことがありません。このあひだ海の近くのちばさまから手紙が来て「海にいらつしやい、面白いところですよ、きれいな——浮袋で泳いだら、どんなに愉快でせうか。子供が大勢泳いでゐます」と書いてありました。

富美子ちゃんはそれを見て

「あゝ海が見たいなあ」

「海つてどんなに廣いのだらう。ちむかひのちばさんところの池の何倍位あるのだらう」

「浮き袋に乗つて廣い海の上を、ふわり〜と浮

いて行つたらどんなにいゝ氣持だらう」

とそんな事ばかり考がへてゐました。けれど、お母さんがながいこと御病氣でとても海なんかつれては行つて頂だけません。富美子ちゃんはお母様のお薬をもらひに行つて歸りにはきつと、裏の小山にそをつとのぼつて、いつかちばいさんが海はあちらの方だよ、と教へて下すつた方に向つて「海は見えないかなあ」と何度ものび上つて見てゐました。

おうちに歸つてお母様にお薬を上げては、神様にそつとちねがひをしました。

「どうぞお母様の御病氣がよくなつて、そして海

に行ける様になさつて下さる」

そして一所懸命に御かいほうをして上げました。そのためにだん／＼お母様の御病氣もよくなつて今日は久しぶりに、おいしい／＼とおつしやつて、御飯も、たくさんおあがりになりました。富美子ちゃんはうれしくつて／＼

「ね、お母さん、御病氣がよくなつたら海へつれて行つて下さいね」

お母さんはニコニコなさつて

「え、つれて行つてあげますとも、浮袋も買つてあげませう」

富美子ちゃんはどん／＼に喜んだことでせう。

「神様お母さんを早くよくして下さる」

と、御願ひをしてやすみました。

◇……◇

富美子ちゃんが、びつくりしたやうにお目を

さました。そして

「富美子ちゃん。富美子ちゃん」

とやさしい聲のする方を見ますと、そこには今まで一度も見た事の無いほど美しい着物を着た、きれいな／＼お姫さまがニコ／＼笑つて立つていらつしやいました。富美子ちゃんは

「ママ……」

と言つたまゝ、びつくりしてゐますと、お姫さまは

「富美子ちゃん、さあいらつしやい。あなたのですな／＼海につれていつてあげますから、そしてほら、浮袋も持つて來ましたからね。あなたのすきなほど洋げますよ、さあそんなにびつくりしないで、いつしよにいらつしやい。ね……」

と言つて、赤と白できれいに模様の出來てゐる浮袋を見せました。富美子ちゃんはもう、うれしくつて／＼、いきなりお床の中からとびだして來ました。

「まあ、おばさま、これ私に下さるんですか、そしてあの、海にもつれて行つて下さいませう」

「ええ、ええ、さあいらつしやい」

富美子ちゃんはうれしくつて／＼小さい胸はもうはちきれさうになりました。

表に出て見ますと、まあどうぞせう、きれいな／＼お馬車がちゃんと待つてゐました。

「富美子ちゃん、さあおのんなさい。このお馬車はね、とても／＼早くつて、一寸の間に海にゆきますよ」

二人はやはらかい羽のはいにつてゐるお座蒲團の上に腰をかけました。お馬車は朝露のキラ／＼光る野原を音も立てずに走ります。しばらくゆきますと廣い／＼お花畑を通りました。

「あら、おばさま、あんなきれいな花が咲いてゐます、あれ、蝶々が舞つてゐますよ」

「あらまあ赤い可愛い花」

「あら……あら……」

と夢中になつてお馬車の窓からながめてゐました。お姫様はたえずニコ／＼笑つていらつしやいました。

◇……◇

「富美子さん、ほら、海が見えるぞせう。ね、ほら、あそこに」

お姫さまの指の向ふの方に青いきれいな海が静かに光つて見えます。

「あら、あの白いものはなんでせう」

「あれはね、お舟」

「お舟、まあ、私の繪本のお舟よりずっとずっときれいですね」

いつの間にかお馬車は海に着きました。見ると富美子ちゃん目の前には富美子ちゃんと丁度おなじ位の可愛い／＼女の子がみんな赤と白の浮き袋を持つて富美子ちゃんを待つてゐてくれました。

そしてみんなお姫様におじぎをしました。

「やつと富美子ちゃんをおつれしましたよ。さあみんな、およいでいらつしやい」

お姫様はきれいなお舟にのつて、子供たちの行く方についていらつしやいます。

海の上に花が咲いた様に美しい浮袋にのつた子供が大ぜい、波にゆられて、フワリ／＼と浮いてゐます。

富美子さんは

「まあすてきよ」あらの鳥は、かもめかしら」

白いかもめが、富美子ちゃん達のまわりをうれしさにとんでゐます。浮袋にのつてふわり／＼とゆられてながら富美子ちゃんは、よい氣持でずん／＼泳いでゐましたが、ふと氣がつかますと、今までゐたお友達もお姫様もだあれもゐなくなつてゐます。富美子ちゃんは、急にさびしくなつて

「あはれやあ。あはれやあ」

と呼んでみましたが、やさしいお姫様はそこらにはいらつしやいませんでした。富美子さんは悲しくなつて思はず「お母さん、お母さん」と一所懸命大きい聲で泣きました。

「はあい、どうしたの、富美子ちゃん、お母さんですよ」

ふときがついて見ますと、富美子ちゃんの枕元にお母様がニコ／＼笑つていらつしやいました。

富美子さんは、

「あら、今のは夢ね」

それでも、何だか不思議さうにお部屋を、見まわしてゐました。お母様はたゞだまつて笑つていらつしやいました。

富美子さんは「お母さんと御一しよであつたらあの夢がどんなに面白かつたらう」と思ひました。「おはり」——昭和四年八月二十日作——